巻　頭　言

「学び」が何に応えるものであるのか，「学び」が真の「幸せな生」と対峙できるのか，これまで以上に真摯に問い続けるという，決して短期間に解決できない課題に向き合おうとした矢先，教育の場における「いじめ」と，その対応の問題が大きく取り上げられる事件が起きてしまった。

学校現場に「いじめ」はあってはならないし，あるはずがないという決めつけが，「いじめ」の問題を大きくしている一因となっている気がする。東日本大震災で起きた原子力発電所の想定外の事故も，原発の事故はあってはならないし，あるはずがないという決めつけが，事態をより悲惨なものにしてしまったのと同じように。今まさに，教育の現場でおきていることを曇りのない眼で見つめ，子どもたちの姿から私たちおとなが真摯に学びとらないといけない事態になっているのかもしれない。おとなや社会の「学び」が，クローズアップされる必要が増しているのかもしれない。

我田引水になることを恐れずに言えば，今のような状況だからこそ，学びにおける理論と実践の融合を目指した学習開発学のまなざしをもって，「学び」を取り巻く諸問題を，さらに追究することが必要になってきている。

昨年 3 月に，自らに課した課題は，真摯に問い続けることであった。今回の学習開発学研究で，理論と実践の融合を目指し，真の「幸せな生」と対峙できるのか，真摯に問い続けた学びの姿を少しでも見ていただけるならば，次の歩みの励みにすることができるだろう。

この研究紀要や編集主体の学習開発学講座の発展には，多くの方々のご指導が必要である。広くご意見，ご批判を賜れば幸いである。

平成 25 年 4 月

広島大学大学院教育学研究科
学習開発学講座主任　　井上　　弥